

うちの
みんなで
読んでね



死者たちは死んではいない。
このことは、我々が生きている
ことから十分明らかである。

アラン（一八六八～一九五二）「幸福論」宗左近訳より



死者は考え、語り、行動する。（中略）
しかしそれには耳を傾けることが必要である。すべては我々の内部にあるのだ。我々の内部に生きているのだ。（中略）死者たちは生きようと欲している。あなたの内部で生きようと欲している。かれらの欲したものをあなたの生命が豊かに展開することを、死者たちは欲している。

アラン（本名エミール・オーギュスト・シャルティエ）はフランスの哲学者。この書籍は、新聞に掲載した幸福に関する 93

編のコラムをまとめたもので、1925 年に刊行。世界三大幸福論の一つと言われる。

ここで「死者」と言うのは勿論幽霊じみた話ではない。真宗的に言えば「仏」となった故人のこと。「南無阿弥陀仏」の名号に変換された不可思議な働きによって、故人は安樂浄土に往生し、同時に慈悲と悟りの働きとなって常に私たちを仏道へと導いてくださる.. と、私たちはお聴聞してきた。

ただその内実を、僧侶は（自分は）生身の感覚を持ってどれだけ語ってきただろうか。もしかしたら、故人からの呼びかけを聴く前に何か別次元へ追いやることで、関

（次頁へ）

大悲のなかに

大悲のなかに

確かにこの私がいます

草など他者から見た時に、私の見え方が絶対的なものではなく、傲慢で不遜な自分の自己中心性が見えてきたといえます。

「野に咲く小さな花が、私を人間に見てくれるなら、それは仏法に遇えたから」。他者の立場から他者を思うことができるのは仏法ゆえと言い、「この救いようのない私を、阿弥陀様はじつと見てくださっています」。正信偈に「我亦在彼摂取中 煩惱障眼雖不見」とあるように、私たちの惑いの目には見えなくても、その大慈悲は倦むことなく常に私たちを照らしています。

親鸞聖人は「弥陀仏は自然（じねん）のやうをしらせん料なり」（自然法爾章）と示されました。この世界全体があるがままのいのちであり、大慈悲のはたらきとは、すべてのいのちを隔てることなく包摂し、救おうとする阿弥陀如来のご本願を示しています。

いのちが形を変えた他者や自然から離れて、私は存在しませんが、大悲の中で確かに私が生きているとは、自他の分断を超えてゆく「対話」の仏道が開けたということです。（引用…「月々の言葉」）

◆これは外松さんの著書「心のポケットに言葉の花束を」からの言葉です。詩人・画家である星野富弘氏の詩

「蟻よ その草が 木に見えるか その石ころが 岩に見えるか 蟻よ 私は何に見える」に大きく感動され、猫や石や

（前頁より）

係に決着をつけようとはしなかったか。

この一節を紹介された批評家・若松英輔氏は講演で「死者に支えられなければ生者は一瞬たりとも生存できない。死者の願いは単に想い出してもらうことではない。生者が死者と『協同』しながら、真実の意味で充実した生を生きることだ」と言う。

「不可視であることは不在と同じか？自分が感じられないことは存在しないことなのか？大多数の人々は、むしろ見えないものの、触れられないもの、五感を超えるいわゆる言い難いものの感触を頼りに生きているのではないか。私にとって死者とは生者との関係、交わりを考える存在そのもの」

若松氏は若くして伴侶を亡くし、東日本大震災の1年3ヶ月後に開かれたこの講演の少し前に父を見送っている。

「遺族となった人は死者の平安を祈るだけでなく、必死に死者の声を聞こうとしたのではないか。死者との関係を望むのは人間の本能だ」「死者とは生者の思い出ではなく、もっと生々しい存在。自分の都合で変えることできない、否定しようが忘れようがそこに存在している実在だ。私たちが彼らを見出すことによるのみ、その実在が証明できる。涙はその証である」

氏はクリスチャンだが「宗教とは死者と生者がともに超越者と不可分であることを示す伝統的な、生きる道そのもの。生者の守護は死者に託された神聖な義務。彼らは訴えるが裁かない。死者もまた生者の奥深い声に耳を傾けている」と述べる。（「死者との対話」より抜粋）語りは違うが真宗の還相にも通じて、何か厳粛さと安堵を覚える。

私の戦後八十年、仏縁を思う（築地本願寺副宗務長 木村共宏 R7.5.24）

●八十年前、私の祖父は二度目の招集で広島に居たところ、原爆の犠牲となりました。遺骨はありません。二か月ほどのち、祖母は広島市内に入り、手のひらにのる石を遺骨代わりに持ち帰りました。その石は今、祖母の遺骨とともにお墓に納められています。

終戦後、産婆であった祖母は街に出て、女手ひとつで一人息子である私の父を育てました。同じように一人息子を抱えた戦争未亡人と出会い、互いに支え合いながら共同生活を始めます。その暮らしは、息子たちが成人して結婚した後も続きました。戦後二十七年を経て私が生まれたとき、私には父方、母方、そしてこの「第三の祖母」の三人の祖母がいました。

私は戦争も戦後の混乱も直接には知りません。明治四十五年生まれの祖母は、子どもだった私には強くたくましい「明

治の女性」に映りました。しかし今思えば、終戦時三十三歳の若い母親が、時代に翻弄され、心細さを抱えながら必死に生き抜いたことは想像に難くありません。

祖母たちの出会いは、まさにおはからい、仏縁であったと思います。苦難を乗り越えて祖母たちが生き抜いてくれたからこそ、今の私の命があります。先人に想いを馳せ、静かに手を合わせるとき、あらためてすべてのご縁に支えられて生きる私であることを味わう、戦後八十年です。

「浄土真宗・唯 yui」秋号 2025.9 巻頭言より



入門！

仏教語 散策シリーズ①

縁起

〔えんぎ〕

向日葵の花はその種から咲く。種が原因で花は結果。しかし種だけでは花は咲かず、土質、温度、水分、日光、栄養分などさまざまな条件（縁）が種に働いて花は咲く。

このように全ての現象には、必ずそれを生んだ因（直接的原因）と縁（間接的原因、助縁）と見るのを**因縁正起＝縁起**と言う。釈尊が悟った、物事の普遍的法則である。

現実には、因と縁と果とが複雑に関係しあい影響しあって成立し（因縁所生、因縁和合）、一切が消滅変化している（諸行無常、諸法無我）。「阿含（あごん）経」に「**これある故にかれあり、これ起こる故にかれ起こる、これ無故にかれ無く、これ滅する故にかれ滅す**」と記される。

俗に「縁起がいい、悪い」とか「因縁をつける」「因果を含める」などと使われるが、本来人為や価値判断を超えた道理であり、自分の都合には関与しない。

（出典：「暮らしの仏教語豆辞典」）



●長く暑い夏が過ぎ、お彼岸の時期に入っただいぶ涼しげになりました。昨年 4 月 28 日往生を遂げた妻の件について、これまでなるべく事実と自分の思いと混同しないようにお伝えしてきました（ここで記せるのはごく一部ですが）。今号では筆者の思いの一端をささやかな体験と共に書いてみます。

絶望的な不在の喪失、ワンオペ忙殺の日々は相変わらずですが、いくつかの出会いや交流にも恵まれながら、少しずつ涙は減ってきたでしょうか。遺品の整理にも少し手をつけ、彼女の少女時代の写真など出てくると、ああ彼女は実在したんだ、この時は将来の運命を知る由もなく人生歩んだらうと、何とも言えぬ気持ちになりました。

●9 月 13 日 16 回目の結婚記念日。友人の一人から病氣治療を例に、「欲」「祈り」「願望」に関しての問いかけがあり、我が身ながらいろいろ考えさせられました。その数



結婚 10 年目 鮎川町にて

日前、9 ヶ月ぶりに平田さんによるカードリーディング。あちらの彼女から、母の介護を自分が手伝えないのを「許してね」と始まり、いきなり号泣。様々なメッセージを簡単に言えば、あえて遠い世界へ行かず自分の傍にいながら共に創造しようとしている、葛藤を乗り越え今は新しい領域に移行しているとのこと…。不思議な交流です。

18 日朝、命終後にも夢見を知らせてくれた衆徒・西條さんから再び夢の報告。「住職の左側に寄り添ってて、もうとにかく最高の笑顔で真っ白の発光している服を着ていらっやいました。お二人にもっと寄って寄って！と言うと、千種さんがより一層笑顔になって住職の顔をずっと見ていました」とのこと。いやもう、嬉しすぎる～！！その翌日に自分も久々リアルな夢を見て会話したり、とても安堵しました。勿論、夢に見ることと成仏や供養云々は別ものですが、夢で会えることは今の自分には大きな喜びです。

●同じ日、元カウンセラー・橋本久仁彦先生ら一行が友人僧侶・泰圓澄さんとご来寺。前回 3 月の際、「臨在する」というお話は胸に染み入りました。妻に面識はないが気にされていたのこと、今回メンバーの方と影舞を演じてくださいました（互いの指先に触れて即興で動く）。

内陣・遺影の前でしばし静謐な時間。終わって自分のほうから場に促されるようにこぼれ出る言葉。先生からも、他者の視点から見えてくる自分（と故人）の姿という話、なるほどでした。

言葉によって、意識によって、集う人間や場によって、あちらの方の臨在が確かになるのでしょう。目を閉じて、白く光る服の彼女が自分に語りかける声を聴く。今の自分の「願望」はそれにつきるかもしれません。(S)

